

2024年12月15日（降臨節第3主日、C年）

牧師メッセージ

「拍子抜けするほど平凡な答え」

（ルカによる福音書3：7-18）

司祭ヨセフ太田信三

救い主を迎える道備えのために、神の言葉がヨハネに降りました。そして洗礼者ヨハネは、悔い改めの洗礼を宣べ伝えつつ、こう言いました。

「蝮の子らよ、我々の父はアブラハムだなどと思うな。」

強烈な言葉です。これはイスラエルの民に対し、自分たちは選民で、救いが約束されているなどと勘違いしてはならないと迫るものでした。神から離れ、隣人への愛を失っているなら、イスラエルの民であっても例外なく怒りの裁きを受けるのだ、という強いメッセージです。人々にとってヨハネの叫びはショッキングなものでした。しかし、当時のイスラエルの人々は、偽メシアや偽預言者に惑わされてしまうほどに救いを求めていましたから、その人々にとってヨハネの叫びは恵みの告知でもありました。群衆はヨハネに問いました。

「では、わたしたちはどうすればよいのでしょうか。」

この真剣な問いは、ヨハネの裁きの告知によって引き起こされました。裁きは人を恐れさせるものです。しかし、その裁きの告知により、生き方への問いが生まれ、悔い改めに結ばれるなら、それは恵みとなります。裁きと恵みとは、切り離すことができない神から贈り物なのです。

さて、洗礼者ヨハネの強烈な説教を聴き、自分の生き方を反省した人々は、生活の劇的な変革が求められることを予想したでしょう。しかし、ヨハネの答えは拍子抜けするほど平凡でした。「分け与えなさい」「規定額以上を取り立てるな」「ゆするな、自分の給料で満足しなさい」…つまりヨハネは「隣人を大切にすること」の日常での実践を求めたのです。信じることは必ずしも日常を捨てることではありません。そうではなく、自己中心的な生き方から離れて、来るべき救い主を中心に生きることが求められているのです。自分の中の自己中心的な思いを取り除き、そこに御子をお迎えするなら、わたしたちは隣人を大切に生きて生きることができます。そこにまことの平和が実現します。

自分ひとりの救いを求めるのではなく、隣人と共に、神による救いを待ち望むのが神の民です。まことの救い主を迎えるため、自己中心的な思いから離れ、隣人を愛することの実践へと自らの日常を変え、来るべき日に備えましょう。